

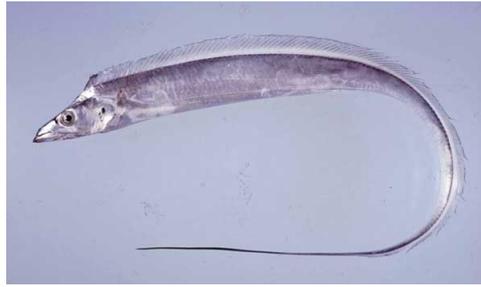
平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 タチウオ

学名 *Trichiurus japonicus*

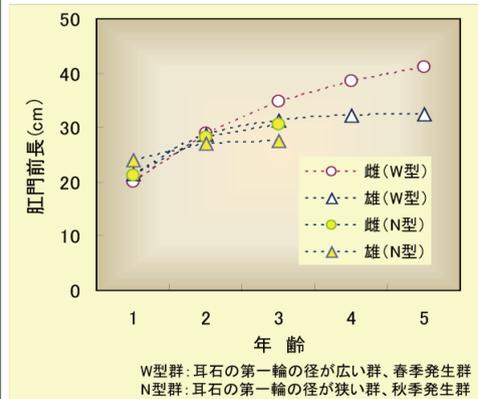
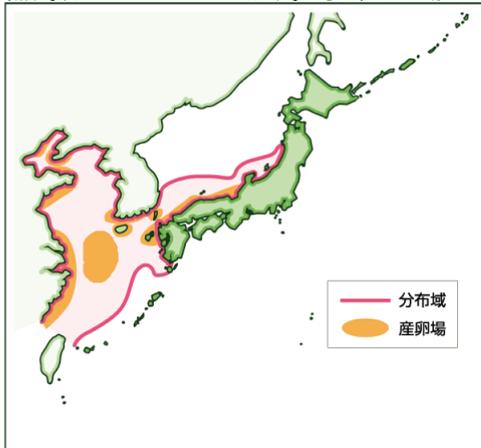
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 8歳
 成熟開始年齢: 1歳(40%)、2歳(80%)、3歳(100%)
 産卵期・産卵場: 春～秋季、九州西方(東シナ海)、盛期は春季で秋季まで産卵が継続、主に黄海・渤海を含めた中国沿岸、我が国沿岸でも産卵
 索餌期・索餌場: 大きな回遊はせず、東シナ海での越冬場は東シナ海中・南部、日本沿岸にも分布
 食性: 主に小型個体(肛門前長200mm以下)は小型甲殻類、中・大型個体は小型魚類
 捕食者: 共食い現象がよく見られる

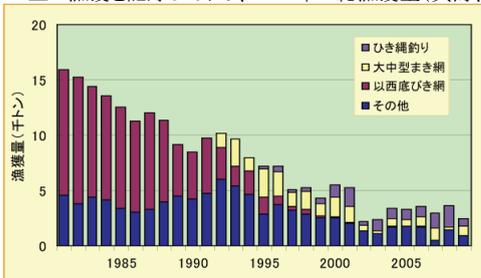


漁業の特徴

かつては全国のタチウオ総漁獲量の7～8割を以西底びき網漁業が占めていた。近年の漁獲量は大きく減少し、現在の以西底びき網による漁獲量はピーク時の0.1%以下になっている。沖合底びき網漁業も著しく衰退した。近年では、巻き網やひき縄釣りなどが漁獲の大部分を占めている。

漁獲の動向

本系群に対する我が国の漁獲量は1980年代から減少を続け、2009年の漁獲量は1981年の16%程度、約25百トンであった。韓国はタチウオを大量に漁獲しているが、漁獲量は1983年の153千トンから2002年以降は6万～8万トン台を推移している。2009年の我が国200海里内における韓国の漁獲量は、約14百トンである。中国は近年100万トン以上の漁獲を記録しており、2008年の総漁獲量(黄海、東シナ海、南シナ海合計)は119万トンであった。



資源評価法

日本の漁獲量、韓国の漁獲量、以西底びき網漁業の近年の操業域でのCPUE(1網当たり漁獲量)、沖合底びき網漁業の資源密度指数などの推移から資源水準と動向を判断した。

資源状態

以西底びき網漁業のCPUEは変動しながらも1988年以降減少傾向が続いており、1990年代後半から極めて低位に推移した。沖合底びき網漁業のCPUEは、1980年代後半より減少傾向を示しているが、近年ではほぼ安定している。大・中型まき網の漁獲量は比較的安定していたが、2002年以降は大幅に減少した。近年は年による変動が非常に激しいが、2008年を除いては、概ね5百～1千トンの間を推移している。これに対してひき縄釣りは、近年ではまき網による漁獲量を超え、1千トン前後で推移しており、2008年は約2千トンを漁獲したが、2009年には約7百トンと激減した。これらのことから、資源量は強い漁獲圧のために1980年代後半から減少を続け、現在では極めて低い水準にあると考えられる。一方、我が国周辺海域では、近年の漁獲量は比較的安定しているものの、過去の漁獲量および資源指標に比べて依然低水準で推移している。2003年以降の我が国周辺200海里内(韓国による漁獲を含む)のタチウオ漁獲量は4千～5千トン台を推移しており、横ばい状態であると考えられる。



管理方策

本系群の資源を回復させるために、過剰な漁獲圧を削減するべきである。しかし、本資源に対する強い漁獲圧の大部分は我が国200海里外における外国によるものであり、資源を回復させるためには、我が国漁業の漁獲量を制限する

のみならず、関係各国との連携により東シナ海全域での漁獲圧を削減することが不可欠である。また、漁獲の適切な管理とともに、生態学的知見を深めることや、我が国水域内で再生産を行っている親魚量を増加させる必要がある。加えて、2009年に我が国における主要な漁業であるひき縄釣りの漁獲量が激減したことに対する予防措置として、2007～2009年の漁獲量の平均に0.7を乗じた値をABClimitとし、その0.8倍をABCtargetとした。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	32百トン	0.7Cave3-yr	—	—
ABCtarget	25百トン	0.8・0.7Cave3-yr	—	—

- 漁獲量は我が国の漁獲量と我が国200海里内における韓国漁船の漁獲量の和

資源評価のまとめ

- 1980年代以降、変動を繰り返しながら資源は減少している
- 漁獲圧が過剰である

管理方策のまとめ

- 漁獲圧の削減が必要
- 資源を回復させるためには関係各国との連携により、東シナ海全域での資源管理が不可欠
- 我が国水域内での親魚量を増加させる

執筆者:塚本洋一、酒井 猛
平成22年11月24日更新

資源評価は毎年更新されます。